

沼津市若山牧水記念館

第34号

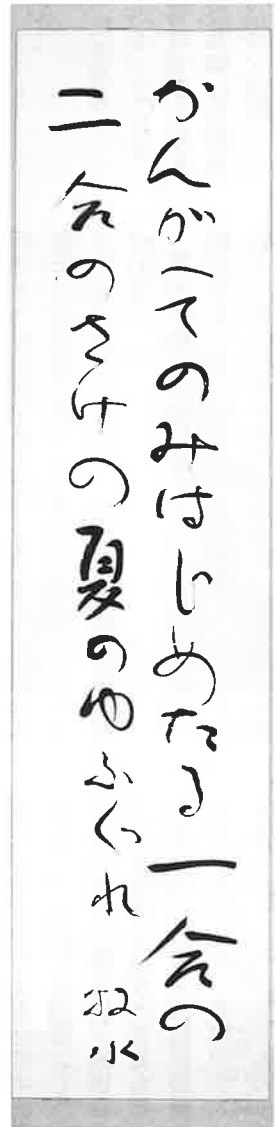
2005.3.15

編集・発行 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/

牧水が酒豪であったのは確かで、いつごろからそんな酒飲
みになったのか定かではないが、明治三十七年の延岡中学卒
業の日(三月二十九日)の日記に「夕方、今山逢萊館に於て
校長職員卒業生の送別会をひらく。八時より別れてわれわれ
卒業生のみ又中町の喜寿楼にあがつて、牛飲猫食、(食は少く
ればなり)人皆酔はぬはなし、快又快。」とある。牧水満十八
歳の春だが、これが酒の初めとは誰も思うまい。牧水の祖父
の健海は酒を飲まなかつたそうだが、祖母のカメは大の酒好
きであったといい、父の立蔵は自他共に許す酒豪で、母のマ
キも酒を嗜んだという。牧水の酒好きは遺伝ともいえよう。
ところで、この歌は第五歌集『死か芸術か』に収められた
ものだが、牧水は後年、『自歌自釈』(『若山牧水全集 第七巻』
増進会出版社 所収)の中で、次のように解説している。

よさうか、飲まうか、さう考へながらにいつか取り出さ
れた徳利が一本になり二本になつてゆくといふ場合の夏
の夕暮の静かな気持を詠んだものである。

小枝子との恋が破綻したのは明治四十二年頃。四十三年四
月に第三歌集『別離』を刊行して一躍歌壇の注目を浴びてか
ら信州を放浪。四十四年に第四歌集『路上』を出し、四十五
年四月太田喜志子に求婚、同月十三日には石川啄木の死に立



ち会い、五月五日に上京してきた喜志子と結婚。新婚の満ち
足りた気分が静かに浸っていたであろうときの作である。
ところが、七月二十日には郷里からの父の病気の報せに単
身帰郷。その渦中の同年(大正元年)九月、『死か芸術か』は
出版された。冒頭の序に、

本書には昨年の秋に出版した『路上』以後の作を収めた。
昨年九月から本年七月まで、即ち我が忘れ難い明治年号
の最後一年間に成つた歌である。……
この『死か芸術か』を界にして、私の生活はどう移つて
行くであらう。これからの我が背景を成すべきこの郷里
は山と山との狭間五六里の間に涉つて戸数僅かに三百に
満たぬ村である。其処から一步も出ることなしに暮して
行くつもりで居る。・日向の国尾鈴山の北麓にて

と書いている。

この歌は、牧水にとって、まさに「激動」ともいえる年の
作であり、忘れ難い愛着のある作品であつたと思われる。半
切や色紙へよく揮毫した。掲示の半切はいつ書かれたものか
は判然としないが、酒に酔つた勢いで乞われるままに一気に
書いたものと思われ、陶然とした酔い心地の思いが表れた書
体がいかに牧水らしい。
(須永秀生)

沼津の文学風土

関口昌男

序にかえて

沼津は、先ず駿河湾と千本松原、そして富士山の雄姿に愛鷹山など、まことにすばらしい風光明媚を誇る自然環境と歴史に富んだ、東海道の道筋に位置する風土である。沼津藩をはじめ、江戸期の駿河国学や沼津兵学校に関わる幾多の優れた人材が、近代日本のある部分を支えた感さえる。特に「沼津の文学風土」といえば、江戸期から近現代にかけてその人材と業績には瞩目すべきものがある。そこで、体系的ではなく、羅列的介绍ではあるが、今後に繋げること視野に入れながらの鳥瞰となった。大方のご理解をいただければ幸甚である。

江戸期に沼津を通過した
芭蕉との関わりについて

東海道を通過した俳人の一人、松尾芭蕉(一六四四〜一六九四)は元禄四年(一六九二)十月末、帰東の途次、沼津宿三枚橋町の間屋矢部九郎左衛門宅で次の一句を揮毫し、その真筆は矢部家の家宝として伝えられた。

都出て神も旅寝の日数哉



芭蕉句碑(日枝神社境内)

この軸は、窪田十郎左衛門対江等の沼津の俳人たちの手に渡り、その模写はあるが、本物の在りかは不明である。

また、芭蕉十哲の一人といわれる榎本其角の師であった大願和尚(幻吁・梵千)は、三津浜の浄因寺の住職であった。鎌倉円覚寺の住持のころ其角に接したという。浄因寺には其角の句碑がある。

▼雪中庵系の駿河進出II芭蕉門下の双壁に、榎本其角と服部嵐雪がいた。嵐雪は雪中庵を自称し、その門流を雪門と称した。天明期になる

と、与謝蕪村・大島蓼太・加舎白雄らが頭角を表わし、駿河伊豆に雪門の蓼太(雪中庵三世)の勢力が及び、宝暦十四年(一七六四)、蓼太は門弟を駿府に派遣、時雨窓を設けさせ、地方の指導にあたらせた。沼津宿の賛川他石は『六花庵三代』を著わして名をはせた。蓼太の門人松木乙児は吉原に六花庵を開き、六花庵二世として知られる官鼠(大村定八)は沼津に居を移して、十八世紀最後の三十年程、この地方の俳句指導者として君臨した。官鼠の墓が、沼津の東方寺にあり、父は三津村の出であった。

また、『東海道人物誌』によれば、原宿の俳人に環亭去留(渡辺三平)がおり、官鼠とも深い交流があった。去留の門人柳沢村の串流亭玉蛾(長倉十郎右衛門盛直)は、愛鷹牧士として去留の同僚でもあった。赤野観音堂には、次のような辞世の句碑がある。

日もながきいざやねがひの旅だたむ

さらに、天保から幕末にかけて、月並み俳諧が指摘されたころ、沼津宿仲町で、薬種問屋を営む種玉庵連山(窪田半十郎司直)が頭角を表し、箱根に関所があるように、沼津にも俳句の関所として、「俳関」を設けたという。

種玉庵らの俳人は、国学者の竹村茂雄らの歌人や沼津藩士の文人とともに、重須村の俳人潮来舎砂明の追善の詩歌琴書画俳会を沼津宿の西光寺で開催した。各地から人々が蝟集し、隆盛を極めたという。こうした明治期に至る幾多の

俳人の活躍があり、沼津の梅庵梅素・桃蹊・烏汀・霜後・赤瀬・梧窓等々の多くの郷土に関わる俳人の華やかな活躍の記録が遺されていることを忘れてはならないと思う。

駿河国学と明治大正期の

文学的人材の輩出について

江戸から明治期の沼津藩や駿河国学等に関わる人物に、竹村茂雄、菊地袖子・西尾鱗角・和田伝太郎・矢田部良吉ほかの多数がいた。さらに近代の沼津の文学関係者に、佐々木邦・遅塚麗水・鈴木不蜚・島本凡狂子・角田竹冷・楨不言舎ほか多数の優れた人材が輩出した。今後にわたって語られるべき方々であり、忘れてはならないであろう。

沼津の文学風土と沼津兵学校の

資業生(卒業生)について

沼津兵学校の歴史的な経緯は複雑であるが、慶応四年改め明治元年(一八六八)に、頭取西周(周)以下の任命が行われ、十二月には、「徳川家兵学校掟書」と「徳川家兵学校附属小学校掟書」が制定され、その後授業が開始された。

沼津兵学校と同附属小学校は、後の沼津中学校の教師及び卒業生と深い関係をもちながら、静岡県立沼津中学校に影響を与えているようにみえる。文学風土の観点から、沼津兵学校関係の人物や文学的活躍について触れたいと思う。



西 周

沼津の文学や学問上で陰に陽にその発展に寄与した優れた指導者のうち、主な人物をあげるとすれば、次の人々が想起される。頭取西周、校長江原素六。素説教授方の名和謙次(眠山)は、江原素六の後任の校長となり、米山梅吉・楨不言舎・稲村眞里らに漢詩文の上で多大な影響を与えた。資業生の塚原靖は、渋柿園の号で、東京日日新聞に小説『由井正雪』『北条早雲』等多数の小説を発表。資業生の田口卯吉は、後の東京市会議員や衆議院議員に当選、法学博士。資業生の渡瀬寅次郎は、札幌農学校で「少年よ大志を抱け」で有名なクラーク先生の薫陶を受け、水戸中学校長や東洋英和学校教頭を歴任後、沼津の西浦に興農学園を設立。資業生の間宮喜十郎は、慶応義塾で学び、沼津尋常小学校長となり、「沼津文庫」創設に尽力、郷土史や地誌にもすこぶる造詣が深い。資業生の中野啓寛は、東京大学で医学を修め、医師開業免許第一号の所有者として知られた。各界名士等の人材輩出は枚挙にいとまがない。

沼津とゆかりの深い文学者について

▼伊藤左千夫 元治元年(一八六四)八月十八日現千葉県成東町の農家の四男として生れた。小学校から成績がよく、明治法律学校へ入学したが、眼病のため断念し、小説『隣の嫁』『春の潮』等を執筆、上京して牛乳搾取業を始め、和歌を詠むようになった。新聞「日本」を通して、正岡子規の知遇を受け、子規の歌会で長塚節や「廠真」高浜虚子らと親しくなり、小説『野菊の墓』(明治三十九年)は絶賛され、根岸短歌会を率いて「馬酔木」から「アカネ」、やがて短歌誌「アララギ」を主宰した。

左千夫が沼津に來たのは、沼津の医師で「アララギ」会員の歌人楨不言舎の招きによるが、明治三十八年の來沼以来六回にも及んだことは、最近まで郷土では、ほとんど知られていなかった。写生文「千本松原」を著わし、千本松原にほれ込んだ左千夫は短歌に千本松原を詠んだ。その後も、千葉県の素封家の廠真や信濃の青年望月光らは、不言舎をたよりに來沼したことも忘れてはならないことであろう。

▼楨不言舎 明治元年沼津の片浜村生れ。本名を豊作といい、旧沼津中学で学び、上京して済生学舎医学専門学校に進み、明治二十五年ころ沼津で楨医院进行開院。その傍ら漢詩、俳句、連歌、和歌等に親しみ、新聞「日本」や「国民の友」「心の花」等に投稿。特に左千夫の「馬酔

木」の草創期から熱心に作品を投稿し有力な會員となった。左千夫の来沼にあたっては、その都度温かく歓迎し、左千夫をして特に沼津の風土を「和楽の地」と激賞せしめた。

▼若山牧水Ⅱ牧水が東京生活を引き払い、沼津の地に新生活を求めてやってきたのは、大正九年八月十五日。沼津出身で早大仏文科の学生神部孝の世話で上香貫に移ってきた。その後千本の地に新居を構えた。牧水は旅と文学を通して幾多の歌友に恵まれ、歌集も多数刊行した。

牧水歌碑は、全国に二百八十余基もあるが、昭和四年七月に建立された千本浜公園の歌碑が第一号の歌碑であり、香貫山の歌碑は、三十五年に沼津商工会議所観光部会が建立した。

牧水の本名は繁。明治十八年(一八八五)八月二十四日、宮崎県東郷村坪谷に出生。延岡中学から早大英文科出身。千本浜や富士、愛鷹山を詠んだ歌も少なくない。昭和三年九月十七日、四十三歳の若さで亡くなった。千本山乗運寺の墓に喜志子夫人とともに眠っている。なお、牧水の葬儀には、尾上柴舟・土岐善麿・太田水穂・富田碎花・阿部静枝・斎藤茂吉・土屋文明・北原白秋らも参列した。

▼北原白秋Ⅱ牧水の葬儀に参列したのをはじめ、沼津へは三回足を運んでいる。白秋(射水)は、若山牧水・中林蘇水とともに早稲田の三水と称された。

白秋は、「沼津薤露行」(『夢殿』所収)で、沼

津の風物を詠んでいる。

狩野の川瀬にすむ鮎の今かさ走りに

ほふその子ら

三津の浜ゆふさりつかた出ありくと絵を描

く友の傍に寄りゆく

▼勝田香月Ⅱ本名穂策といい、明治三十二年三月十二日、沼津町本町で生れた。六歳の時、沼津大火に被災し一家離散。父の相場取引が失敗、生活は困窮する中でも学業は抜群だった。

当時の雑誌「日本少年」を愛読し、文学的な覚醒への契機になって、同誌に投稿を始めた。上京して通信教育の日本国民中学会に勤め、苦学した。やがて彼の才能と勤勉が認められ、同会の機関誌「新国民」や「女子の友」の編集長となった。全国の苦学する青少年を激励し、自らも詩作に励んでいた。そのころ詩人の生田春月、平井晩村の知遇を受け、生田春月の「月」の一字を貰い、故郷の香貫山にちなみ、「香月」と号したといわれる。

大正七年の冬に、啄木碑を北上川に尋ね、十和田湖への途次の大滝温泉の宿で「出船」の詩は出来たと自ら述懐している。

今宵出船かお名残り惜しや／暗い波間に雪が散る／船は見えねど別れの小唄に／沖ぢや千鳥も泣くぞいな

今鳴る汽笛は出船の合図／無事で着いたら便りをくりやれ／暗いさみしい燈影の下で／涙ながらに読もうもの

当時「出船」は、藤原義江によってレコード化され、世に迎えられて名声が高まった。

その後、東京中野町会議員に当選、社会民衆党中央委員として活躍。昭和四十一年六十七歳の生涯を閉じ、東熊堂の大泉寺に眠っている。「出船」の詩碑は港口公園と大泉寺にある。



大泉寺にある勝田香月碑

▼明石海人Ⅱハンセン病歌人なので、長い間出生地は浜松等と曖昧なままだった。大正十五年発病。昭和二年に岡山県長島愛生園で病を癒し、数回の帰省以外は故郷へは帰らず、逝去した。最近になって、海人の本名が野田勝太郎で、明治三十四年(一九〇二)七月五日、駿東郡片浜村に出生の事実が判明。沼津商業学校卒業後、静岡師範学校に学び、富士郡伝法小学校の教員となった。家族もでき、幸せのさなかの大正十五年一月ハンセン病を発病し、退職を余儀なくされ、家族と訣別して明石へ赴いた。「明石海人」

のペンネームも、そこに起因する。当時不治の病とされ、隔離政策がとられ、戸籍から除かれ、この世から排除される不幸な時代であった。

医師の眼の穏しさを趁ふ窓の空光りつつ花の散り交ふ

沼津千本浜公園の歌碑に、「癩は天刑である」ではじまる慟哭の歌集『白描』の序文と次の歌が刻まれている。

さくら花かつ散る今日の夕ぐれを幾世の底より鐘のなりくる
シルレア紀の地層は香きそのかみを海の蠍の我也棲みけむ
ゆくりなく映画に見ればふるさとの海に十年のうつろひはなし

沼津商業高校にも、次の歌碑がある。

わが指の頂きにきて金花蟲のけはひはやがて羽根ひらきたり



沼津商業高校にある明石海人の歌碑

▼井上靖 大正十年浜松中学に入学、翌年、沼津中学(現沼津東高)へ転校。三島から通学し

たが、十四年沼津の下河原の妙覚寺に下宿。沼津中学で藤井壽雄・岐部豪治・金井廣等の文学好きな友人たちから触発を受けて文学に開眼。

四高を経て京大卒。毎日新聞入社後、『闘牛』(昭和二十二年)、『狼銃』(二十三年)を発表。二十五年に『闘牛』で芥川賞受賞。

千個の海のかげらが

千本の松の間に

挟まっていた

少年の日

私は毎日

それを一つずつ

食べて育った

井上 靖



千本浜公園にある井上靖文学碑

『夏草冬澗』『あすなる物語』(主人公の沼津中学での文学的開眼を踏まえ、千本浜、妙覚寺、三津浜等とともに、狩野川河口の美しい光景が描かれている)、『しろばんば』は、少年時代の自伝的な小説としてベストセラーとなった。文化勲章受章者、沼津市名誉市民。

▼芹沢光治良 明治二十九年五月四日、現沼津市我入道生れ。生家は代々網元だったが、父は天理教信者で、財産を神に捧げ、一家は無一物となり、幼い時から漁船に乗ったが、船酔いなどで向かず漁師失格。篤志家の援助を受けて沼津中学校に進み、卒業後、代用教員を勤め、

その蓄えで一高へ入学。実業家の援助を受けながら大正八年、東京帝大経済学部に入學、卒業後は農商務省に入省。昭和五年、雑誌「改造」に小説『ブルジョア』が一等に当選。その後『愛と死の書』(十二年)、『巴里に死す』(十七年)自伝的小説『人間の運命』(三十七年)によって、名声を高めた。四十年には日本ペンクラブ会長になり、五十四年に沼津市名誉市民となる。

我入道の海岸には、芹沢文学館とともに、新旧二つの文学碑がある。



幼かりし日 われ
父母にわかれ
貧しく

この浜辺に立ちて

海の音

風の声をききて

はるかなる

とづくにを想えり

一九六三年

芹沢光治良



ふるさとや
孤絶のわれを
いだきあぐ

八十五翁

光治良

▼太宰治Ⅱ平成十二年、三津浜の安田屋旅館前に、太宰治の「斜陽」文学碑が建立された。



海は、かうしてお座敷に坐つてゐると、ちやうど私のお乳のさきに水平線がさわるくらゐの高さにみえた。「斜陽」太宰治

ここから見る海の光景は、いかにも太宰の文章そのものである。除幕式での太宰の長女津島園子の挨拶は、父と娘の関係がじかに伝わるしんみりした内容だった。

太宰治は、青森県津軽生れだが、昭和七年（一九三二）に沼津市志下の坂部啓次郎宅に身を寄せながら、『思ひ出』や『晩年』等を執筆。三島の坂部武郎宅で『ロマネスク』等、二十二年に三津浜の安田屋で『斜陽』を執筆したとされている。有名な『人間失格』は、二十三年に熱海起雲閣で書かれたといわれる。

▼田中英光Ⅱ大正二年一月十日、東京赤坂生れで、湘南中学に入学。兄は東大出、姉は津田塾出、父は鎌倉に別荘を持つ文部省の高等官で、典型的なお坊ちゃんであった。昭和七年早大入学とともにポート部で活躍。ロスアンゼルス

オリンピックに出場し、その時、女子走り高跳び選手の相良八重と親しくなり、その体験が小説『オリンポスの果実』となった。「君の小説を読んで泣いた男がいる」という太宰治からの好意的な葉書の受信が、太宰に師事する契機となった。

十六年『われは海の子』、十八年『雲白く草青し』を刊行し、太宰との関係も深まった。出版社の桜井書店主桜井均の勧めで、三津浜の富士屋へ疎開した。二十一年三月日本共産党員となる。沼津地区委員長となり、活発に活動していたころ、牧水の長女岬とも知り合った。太宰治は、そのころ田中から三津浜の安田屋を紹介されたといわれている。



地元の画家赤堀尚氏(左)所蔵の田中英光が少年の頃の息子を描いた油彩画を渡され、驚喜する英光の息子英一郎氏(右)(平成16年の「沼津桜桃忌」で)

二十三年六月、太宰治が自殺すると、田中も衝撃を受けて、翌二十四年十一月三日の夕方、アドルム・カルモチンを過剰に服用し、三鷹の禅林寺の太宰治の墓前で自殺した。

▼大岡信Ⅱ昭和六年二月十六日、三島市生れ。父は窪田空穂系の歌誌『菩提樹』主宰大岡博。

沼津中学に進み、同人誌「鬼の詞」等を仲間と刊行、詩や短歌を書いた。一高を経て二十八年東大国文科卒業。読売新聞外報部に入社。三十一年第一詩集『記憶と現在』、三十六年『抒情の批判』刊行。のち明大教授となり、『蕩児の家系』で歴程賞受賞。四十七年評伝『紀貫之』で読売文学賞受賞。日本現代詩人会会長、日本ペンクラブ会長等歴任。東京芸大教授。日本芸術院賞、恩賜賞、文化功労賞を受賞。平成十五年文化勲章受章。平成十六年沼津市名誉市民。

なお、芹沢光治良、井上靖、大岡信の三名ともに旧制沼津中学校の出身者で、日本ペンクラブの会長職を歴任しており、全国的にもあまり例をみない栄誉であろう。



【筆者プロフィール】

昭和十一年埼玉県生れ。日本大学文学部国文学科卒、広島大学文学部へ国内留学。「街路樹」に入会、「真樹」同人等を経て、「ある」創刊に参画、編集同人。歌集に『朝明けの海』『冬の鷹』『蟹気楼』。著書に『中村憲吉とその周辺』『槇不言舎の研究』。静岡県歌人協会賞、静岡県教育委員会賞を受賞。昨年十月、当会主催の文化講座で講演し好評を得た。現日本大学講師。静岡県歌人協会副会長。

第十五回中学生短歌コンクール

日常の中に短歌を拾う

毎年行われている「中学生短歌コンクール」も回を重ねること十五回目となった。市内十五校から寄せられた作品は、総数一、三一五首であった。年々歌数が増してゆくのはうれしい。

現在、歌人とよばれる人々の中でも、中学生時代に短歌に出逢うことの出来た人は数少ないと聞く。柔軟な感性に落とされた種子がどのように育ち開花してゆくのか、それは楽しい限りである。どうかこの出逢いの幸運を三年間という短日で終らせることなく詠いつづけて欲しいとしきりに思う。

今回も部活動、夏休み、修学旅行などの素材が多かった。中でもそれらが単に報告にとどまらず、独自のまなざし、感じ方、ことばによって立ち上がった作品には、揃って選者の目が集まった。

作品を見て行こう。特選の中から。

義政も好きだったろうなこの眺めシャッタ
ーの音時を切り取る 大嶽麻里(第一中)

歴史の背景をきちんと捉え、確かな描写柔らかな表現でありながら、結句は非凡に結んでいる。

何にしよう土産を探す京の夜思い出話も共に包もう
古屋有美子(第一中)

初句から自分のことば、端的でしかも下句に詩情がただよ。楽しんで土産物を探す姿が彷彿とする。二首共に個性が光る。忘れられない

思い出の一駒となるはずである。

迎え火を焚きつつ父を思い出す強い力のキャッチボールを
鈴木真剛(金岡中)

生前の父親の力強さを迎え火にしのおぶ

自分もまた強くありたいと願う真情がこもる。

「ただいま」と無人のわが家に声かける体は暑く心むなしく 梅澤光平(第二中)

暑さの中たどりついたわが家に「お帰りなさい」の応えがない。世相の一端がさらっとさし出された。凝らした技巧はないが、胸を打つ。

幼い日抱いてもらった祖母の手をそとつないで階段登る 手塚亜純(浮島中)

その大切な手をそとつないで添い人となるここに思い入れがあり作者も仕合せ。以上の三首、家族愛に裏打ちされた中学生らしい感性で詠いあげている。

図書館の前に群飛ぶ赤とんぼ夏の終わりの風のさみしさ 松原真祐子(第五中)

作者の心象が投影された一首、夏休みも終り心の中を風が通りすぎてゆくような…。

鈴虫が楽しく夜に鳴いている団地の隅の小さな広場 比嘉ミチトシ(今沢中)

広場とは名ばかりの団地の空間に夜が来れば鈴虫がわが世とばかり鳴きつぐ。団地の隅の小さな広場」が何ともささやかで効果的。

ぶくーつとふくらむふぐを見て笑う威嚇して
るのに笑われるふぐ 田中裕也(第五中)

このゆき違いの面白さ、しかし「面白うてやがて悲しき…」に通う慈味がある。視線の暖かさであらう。

以上三首は身のまわりのどこにでもある風景、情景なのだが実はむづかしい歌域であり深めて欲しい方向である。

鋭い目カツと開くは仁王像私をにらむ私もにらむ 中川愛美(第五中)

仁王像の擬人化がその緊張の瞬間を見事に表し得た。臨場感が際立っている一首。

母の背を越えるその日がついに来たあと五センチは伸びたいけれど 山形知世(大平中)

背丈の伸びを喜ぶ思いと母を見下ろす申訳なさや交々だ。結句にやさしさがにじむ。

選には、沼津牧水会の川口和子、須永秀生、杉山芳春、曾根耕一、青木朝子の五名が当たった。

この世の最初の人間の
ような気持
で、あなた
の見たり体
験したり愛
したり失っ
たりするこ
とを言おう
とおとめなさい。

(リルケ『若き詩人への手紙』より)(青木朝子)



「沼津牧水祭・碑前祭」での表彰式(沼津市若山牧水記念館)

第九回若山牧水賞に 米川千嘉子氏の歌集『滝と流星』

宮崎県、宮崎県教育委員会、延岡市、東郷町、宮崎日日新聞社で構成されている若山牧水賞運営委員会による第九回「若山牧水賞」の受賞作品は、米川千嘉子氏の『滝と流星』（短歌研究社）に決り、授賞式が一月二十八日（金）宮崎市の宮崎観光ホテルで行われ、式後に、選考委員の一人である馬場あき子氏の「自然の心と心の自然」と題する記念講演があった。本会からは林茂樹理事長が出席した。翌二十九日、米川千嘉子氏の受賞記念講演「喜志子・牧水、二つのいのちの歌」が東郷町総合文化センターで催された。

米川千嘉子氏は、一九五九年千葉県野田市に生まれ、早稲田大学第一文学部日本文学科を卒業、同大文学部国文学専攻科修了。その後七年間、千葉県内



の高校に勤め、七八年に「かりん」に入会。八五年に「第三十一回角川短歌賞」を受賞。「かりん」会員の坂井修一氏（東大教授）との結婚、出産を経る中で、世界情勢にも鋭い目を向けながら、未来につながる現在を見る目で、家族や家庭を詠ってきた。歌集に『夏空の権』『一夏』『たましひに着る服なくて』『一葉の井戸』、著書に随筆集『四季のことは一〇〇話』がある。「現代歌人協会賞」「河野愛子賞」を賞している。

『滝と流星』は第五歌集。悲惨なことが多く起こった現在、人々が一心に祈りを捧げた自然や神や人の命を思つてのタイトルであるという。「人が人を愛するということ」を基礎に、子ども、夫から社会、果ては戦争へとテーマに広がりを持たせている」と高く評価された。自選作品の中から五首を引く。

息子の白いお尻ももうすぐ見なくなる洋服をきた母と子になる

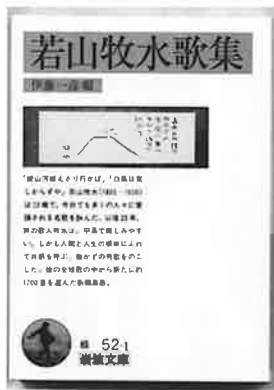
神は滝であるといふしづけさははるかな日あまた苦しむ人を救へり

空爆の映像果ててひつそりとへ戦争鑑賞人へ立ちたり

お軽、小春、お初、お半と呼んでみる ちひさいちひさい顔の白梅

何も答へず思ひたければ思へといふ古墳のやうな人と散歩す

◆ 新刊紹介 ◆



『若山牧水歌集』は、昭和十一年に妻若山喜志子の編集で岩波文庫に収められ、幾度か増刷されてきたが、昨年十二月に同文庫の新版が発行された。

「若山牧水賞」の選考委員で平成十五年の「沼津牧水祭短歌大会」の講師として、また同年開催された「沼津文学祭」のシンポジウムのパネラーとして来沼された伊藤一彦氏の編になる。

新版には、千七百首載せられている。歌集別に編集されているが、初句索引が付き、活字も大きくなるなど、細かい配慮がなされ、たいへん読みやすくなっている。

編者伊藤氏の解説も懇切であり、「まずは読者諸賢が牧水の歌に親しんで下されば編者としてはこれ以上の喜びはない」と牧水に対する思いがこもっている。

定価 七六〇円。当館で好評取り扱ひ中。